

はじまりの種を育てる

後藤 サヤカ

ドキュメンタリー映画の監督をはじめ、幅広い活躍をされる後藤サヤカさん。初めての映画作品となる『はじまりの島』（2012年）を撮影した折には、ロケ地の久高島で栽培された豆から力をもらったことで、ハードな日々を乗り切れたのだとか。

現在は、最新作『Buddhist—今を生きようとする人たち—』（2015年）の撮影をきっかけに、深く関わるようになった「仏教」を、若い人たちに伝える仏教塾なども主宰されています。

「観た人の肚(はら)に響くような作品を、送り届けたい」と語る後藤さんから、はじまりの島・久高島で出会ったことや考えたことを中心にうかがいました。

久高島の豆に力をもらおう

今日は久高島のアズキをもってきました。去年（2015年）の秋にとれたものですが、台風が沖縄地方を通過することが多かったようで、いつにも増して作るのが大変だったみたいです。久高島は、始終海風

にさらされているような荒々しい土地です。でもそういう所でも収穫ができる豆には、力強さを感じています。日本の食文化のなかで“お米”はもちろん大事ですけど、私自身はあまり食べる習慣がなくて。よく食べるのは野菜や豆とか……まるで縄文人のような食生活をしています（笑）。もっと言うと私は、一日でふつうの人の一食分も食べないくらいの小食で。自分が本当に欲するもの、食べたいと思うものを、食べたい時に摂るようなスタイルなんです。

映画を制作するのに、自分で資金を作るところから寝る間もなくやってきて—この経緯はあとでお話しします—、体調をくずしたことがきっかけで、必要以上の食事を



かつて力をもらった、久高島のアズキ

撮らなくてもいいと思えるようになりました。

だから2009年に初めて、いつか撮る映画のリサーチのつもりで久高島を訪れた時もそうでした。沖縄そばのような、いわゆる沖縄料理を食べる気にはならなくて、たまたま「ぜんざい」とあったので頼んでみたら……かき氷だったんです。こちらでいう「ぜんざい（甘く煮たアズキを使った温かい汁粉）」は、“ホット”ぜんざいと呼ばれていました（笑）。

久高島のぜんざいには、黒糖で甘く煮た豆（金時豆、アズキ、ウズラ豆など）の上に、かき氷がのっています。それを食べたときに、大げさでなく、言葉に詰まるほどのエネルギーを感じました。自分が求めている時に求めるものを撮る、という声に従ったら、頭で考えていた以上に体に入ってきた時の“力がみなぎる感じ”がすごかったです。

のちに個人指導をしている野口整体の先生に聞いたところ「“体の声を聞いて、欲しているものを撮る”のは、整体的な食生活といえますね。本来はそれが正しい。無理に食べても、消化吸収にエネルギーを使うから。体が弱っている時に食べたくないのは当たり前だから、無理をする必要はないですよ」と言ってもらいました。

久高島での体験も昼食の時間だからではなく、自分の体の声を信頼して「あ、久高の豆が食べたい」と思った時にそうしたから、「これ一食で十分」と感じられる力をもらったのかなと思いましたね。



久高島の「ぜんざい」とはかき氷のこと！ 甘く煮た豆が埋まっている

久高島の原点をみた旧正月

もともと「いつかは沖縄を舞台にしたフィクション映画を撮りたい」と考えていました。あくまでもその候補地のひとつとして、2009年の夏に初めて訪れたのが久高島だったんです。その後、島を何度も訪れています。そこで暮らす人々や歴史に触れるたび、島のおすごさを感じました。

島に残る祭祀行事は、600年以上前から続いているそうですが、私たち現代人が見失いがちになっている“原点の感覚”のよう



後藤サヤカさん

なものを、ずっと大事にもち続けてきた場所なのだと思います。だから久高の豆からも、その土地に育ったエネルギーのようなものを感じたのかもしれませんが。

映画制作をはじめた頃は本当に昼も夜もなくで……自分を毎日駆り立てながら、やっていました。『はじまりの島』は、旧正月の祭祀を執り行う様子を撮影したドキュメンタリーです。旧正月は規模が大きだけでなく、島の外に出て行った人たちもこの時ばかりは戻ってきますし、去年一年を無事に過ごせた感謝の祈りと、これからの一年、皆が健康で生きていけるようにという祈りを込めて、盛大にお祝いします。

「この島の様子を、とにかく切り取ってみよう」というところから、撮影をはじめました。

旧正月では、島の女性が神様の役に就きます。久高島ではかつて、島最大の神事である「イザイホー」が執り行われていました。これは12年に一度の午年に、島で生まれ育った30歳以上の既婚女性が「神女」になる神事です。ただしイザイホーそのもの



『はじまりの島』に登場するおじい、内間新三さん（久高海運代表）

のは、1978年を最後に途絶えてしまっています。というのも神女になれるのは、島で生まれ育った両親から生まれた女性だけ。島民がどんどん減っているのでも、神女になれる女性もまた少なくなっているんです。

だから形を変えてといえますか、島民の両親から生まれたおばあちを神女に、それに若い女性（私と同じ年の32歳だったか……）を神女の中心として、旧正月に儀式を行っています。イザイホーは途絶えてしまいましたが、新しい形をとりながらも続く一連の行事が、久高島を象徴しているように思えて。映画のテーマに据えることにしました。

さらに映画では、一人のおじいにも焦点を当てています。内間新三さんは島で生まれて、現在は沖縄本島を結ぶ連絡船を運航する海運会社の社長さんです。このおじいさんが歌っている様子も、映像におさめています。先の戦争で何度も死にかけながらも、島の人たちの暮らしを本当に支えてきたおじいは、島の力強さそのものといってもいいかもしれません。

ご自身は90歳近くなりますがお元気で、

まだ会社の受付でお仕事をされています。
この間も電話でお話ししたばかりです(笑)。

東日本大震災で「今を生きよう」と決める

何年もかけてじっくり作品を撮る方たちからみたら「たった数日間で撮った作品なんて、ドキュメンタリー映画とはいえない」と思われるかもしれません。でも「いつかこうしよう」ではなく、できる限り早い段階で「これからをどう生きるか」を考えられる映画を作ろう」という思いが出てきたのは、二度の震災に遭ったからです。

私は兵庫県出身なので、1995年に阪神・淡路大震災を、そして今も住む東京で2011年に東日本大震災も経験しています。東京で震災に遭ったとき、電車のなかで止まらない揺れに自然と涙が出て、子供の頃の恐怖や記憶を体が覚えていたことに気づきました。

ちょうどその頃、二年前に仲間とつくった会社をいったん解散して、現在の会社(合同会社メイジュ)を一人で立ち上げ直そうとしていた頃でした。アーティストのプロデュースなどの音楽事業に携わる会社でしたが、ちょうど地震のタイミングに“(会社を)バラバラに解体しよう”と話をしたこと自体、すごく不思議な経験だと思っています。震災後すぐはなかなか仕事もありませんでしたし、周りで起きるいろいろな現実を目にして「今まで通りの生き方は通用しない。世の中をただ否定したり批判したりするのではなく、本当に大事なものを、大事にする生き方をする」と決め

ました。

その年の秋に、国内外の環境映像コンテンツを配信する「GreenTV」の方と意気投合。番組制作に参加することになったんです。そこで農家のお母さんたちの話を聞いたり、暮らしの原点といえる姿にふれることで「当たり前でできていることは、実は当たり前ではない。食べもの一つとっても、どこから来たか？ それを作っている人たちは誰なのか？」に目を向けることが、震災後を生きる上で大事なことでないか」と気づかされました。

すでに久高島には出会っていましたが、原点に立ち返らせてくれたこの島をテーマに、映画を作ることを決めました。震災後、自分がいつ死ぬかわからない、映画が完成するかもわからない。でも「今」というこの一日一日を、大事に生きたい」と思ったのだから、とにかくそこに向かおうと思って。撮影は2012年1月末の旧正月に、公開は同じ年の6月、そしてイベント上映の劇場も先に決めて、そこからスケジュールを逆算してとにかくやりきったんです。

震災をきっかけにたくさんの問題が突き付けられた、カオスみたいな東京で立ち止まり、自分なりの真実をいろいろな角度から見つめていこうと。2011年3月11日から、自分は本当に生きているという感じがしています。

二作目の映画は、仏教がテーマに

いまは、二作目の監督作品『Buddhist—今を生きようとする人たち—』(7ページコ

ラム参照)の上映会で、全国各地を飛び回っています。「久高島の次になぜ仏教？」と不思議がられることも多いのですが、「次のテーマは仏教だ！」と決めて準備をしたわけではなくて。これも『はじまりの島』からの自然の流れで、次の作品が“はじまってしまった”という感じです。

『はじまりの島』を劇場公開した時に、以前から知り合いのデザイナーを通じて、僧侶の松本紹圭さん（浄土真宗本願寺派光明寺僧侶。超宗派仏教徒のウェブサイト『彼岸寺』(higan.net)を設立し精力的に活動している）をゲストに迎えることができました。この頃あたりから仏教との縁ができ、唐招提寺や永平寺など各地のお寺に足を運んでみたら、今までと違う興味の持ち方をした自分があることに気がつきました。久高島とはまた違った形で「仏教は、人間が生きていく原点（原典）がそこにある、“実践哲学”では」と思うようになったのです。

映画では、6人の僧侶とその日常が登場します。一番最初に出会ったのは、三浦明利さん（浄土真宗龍王山 光明寺住職、シンガーソングライター）。たまたまお子さんを妊娠中の時期でした。こんな貴重な機会に出会えたのだから、記録だけでも撮らせていただくこと、産休に入る直前の講話ライブを撮影したのがはじまりです。

映画は、最初から構成を決めて撮っていったのではなく、そのときの自分だからこそ会えた僧侶に、それぞれ引き寄せられるように会って、また次の方に呼ばれて行って……と。制作資金すべてを作りなが

らの撮影でしたから、時には「なぜここまで、自分は無我夢中になっているんだろう？」と思うことも、体調をくずしたことも数え切れないほどありました。

でも、制作するなかで、僧侶の方の話や言葉を聞いたり、在り方や姿を見ていくことで、仏教が自分の血肉になっていった気がします。頭で理解した「仏教って面白い！」ではなく、何十時間と僧侶の方の姿を観て話を聞いていくなかで、「この人の、この言葉、本当にそうだな」と自分の身体に落とし込まれていった内容を、何十時間の撮影記録から、一人10分ほどの映像に編集しています。

藤田一照さんの「仏教塾」をプロデュース

今回は映画のことを中心にお話ししましたけれど、私は映画制作だけではなく同時進行でいろいろなことをやっています。そのなかでも、深い関わりがあるのが、曹洞宗僧侶の藤田一照さんです（曹洞宗国際センター所長。東京大学大学院時代に坐禅に出会い深く傾倒し、17年半にわたりアメリカで禅の指導を行ったのち帰国。以下、一照さん）。『Buddhist』の撮影で数多くの方に会うなかで、ポーランド人の僧侶に「こういう面白い人がいるよ」と教えてもらった一人でした。

一照さんが“坐禅”についてのインタビューを受けていたある記事を読んで、「この人と会わなきゃ！」と思って間をつないでもらって、すぐ会って。「この人の活動を追いたいし、記録を撮りたいし、協力したい。

とにかくついて行く！」と、映画に登場いただく以上に、本気で一照さんに協力しようと思って、動き出したんです。

一照さんは自分からは「協力してほしい」とは言わない方だし、僧侶ではあるけれど寺を預かる住職ではない。「一照さんが考えていることを、このまま自分の代で終わらせるつもりですか!？」と問いかけました(強引ですが・笑)。一照さんは「弟子を持ちたいわけではないけれど、自分がやってきたことを次の世代に渡していきたい」とはおっしゃっていたので、仏教で人生を学び・探求する場を立ち上げることにしたんです。

2015年4月11日から「仏教的人生学科一照研究室」を開講。前期・後期の2期制で、仏教書(英語)の講読や、瞑想や坐禅の実修、からだ育てのソマティックワークなどを行っています。

今やっているすべてのことは、“上手くいく”という確信を持って進めています。それに、それらが世の中に必要なのか私が迷っていたら、作品を世に送り出すことはできません。作ってきた映画たちもそうだし—私にとっては子どものようなものです—、一照さんとのプロジェクトもそうですし、これまでのことが全部つながって、“ただこの、今ある命を生きること”に立ち返るものを作っていきたいのです。それができたら、今の日本や世界で起きていることが、自然に見えてくると思っています。

映画のサブタイトルにもしましたが、「今を生きようとする」ことでむしろ、深く生

きていることになると思いますか。今、ここにいる時間もすごく楽しいし、何でもない日常に心地よい風が吹いていることも「幸せやな」って思うし。幸せという言葉はあまり使いたくないけれど、何でもない日常を「生きているな」と感謝ができるのも、どうなるかわからない命を生きているからこそですね。

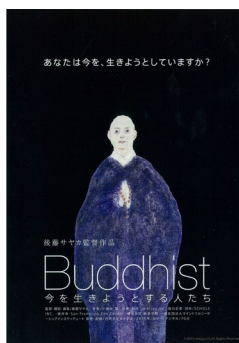
コラム：後藤サヤカ監督最新作品

『Buddhist—今を生きようとする人たち—』

出演者：ネルケ無方、藤田一照、星覚、吉村昇洋、麻田弘潤、三浦明利

2015年/カラー/デジタル/70分

公式サイト：<http://buddhist-movie.com>



「あなたは今を、生きようとしていますか?」

2年の歳月を費やし、仏教と真摯に向き合う6人の僧侶の活動を記録したド

キュメンタリー。仏の教えを通して、個(自身)と社会をみつめる活動を、それぞれの切り口で行っている様子を追っています。全国各地で上映会が開催されており、来年の2017年には海外でも上映予定。